



大津絵

ここで「大津絵」と言うのは、江戸時代に琵琶湖の南端に位する大津の街、それも京都へ向う旧東海道筋に沿った街はずれの地——追分・大谷の辺りに店を出し、無名の絵職人が道ゆく旅人に描きながら売った絵のことで

大津仏画の発生

慶長7年に京都で東（大谷派）本願寺創建のことが持ちあがり、その建立地域が本願寺（本派）の参道に当たっていて、ここに住んで本願寺参詣の人達相手に庶民用の仏画を描いて売っていた職人絵師が、立ち退きを命ぜられました。そこで大津の追分に代替地を与えられて移り住み、ここで引き続き仏画を描いて旅人に売ったのだと推定されています。このことで仏教とは関係の薄い大津の追分の地で、仏画が売られた理由もわかります。

初めは京都で描かれたのと同じものが描かれていたでしょうが、次第に一見して大津で

描かれる仏画だとわかるようになったようです。それが寛永の頃からであったであろうという推定から、大津絵が描き始められたのは寛永の頃だと考える人が多いのです。その頃に描かれたと思われる仏画で、現在に残されているものを見ますと、種類は仏像では阿彌陀仏・三尊来迎仏・青面金剛・不動明王・地蔵尊、神像では「天神」など15～16種類で、大衆信仰に関わりのあるものが大部分です。それで一見して大津で描かれたものだとわかるとは言え、まだ一般仏画と大差はなく充分大津絵に熟していない感じですから、これは「大津絵仏画」と言うよりは「大津仏画」と言った方が適切ではないかと思えます。絵の紙は有り合わせの半紙を2枚、3枚又は4枚と継いだものを使い、絵の具は泥絵の具や眞鍮泥を用いました。

手法は先ず継いだ紙に薄く黄土を引いて墨が滲まぬようにして置き、これに描表装（表装したように墨で描いたもの）を施し、その表装内に合羽刷法（現在の紙版画の方法で先ず色付けをし、のちに肉筆で輪郭・描線等を引く法）で画像を描き、円は一筆規を、直線は定規を用いました。これは一般仏画にも用いられた手法で、量産することが出来ました。なお、絵の両端に竹や木の細い軸を付けて幅



天神（日本民芸館蔵）、
大津神像



▲阿彌陀（内田氏蔵）
大津仏画



▶達磨（日本民芸館蔵）

にして売ったのです。買った人は直ちに掛けて
 して礼拝が出来ました。それから寛文の頃には
 幕府のキリシタン禁制取締りが厳しく、戸毎
 に仏画の一幅ぐらいいは掛けて、キリシタン信
 者でないことを示さねばならなかったらしく、
 そのため大津仏画も売れたようです。そう
 して貞享以降になって画像は速描きや省略描
 きが行なわれて、ようやく「大津絵仏画」と
 言い得る像が描かれるようになったのです。



青面金剛（日本民芸館蔵）
 大津絵仏画

大津絵仏画

有名な芭蕉の句「
 大津絵の筆の始めは
 何仏」は元禄4年正
 月に詠んだもので
 すが、この時はまだ盛
 んに仏画が描かれて
 いた事がうかがわれ
 ます。しかし、宝永
 ・正徳も過ぎ享保時
 代になりますと急に
 仏画は売れなくなり、
 描かれなくなったの
 です。それは元禄時
 代を経て庶民が富裕

となり、信仰の用に供するのだから金襴で表
 装したような高価なものを用い、粗末な大津
 絵仏画は求めなくなったからでした。

大津浮世絵の誕生と初期大津絵

一方において江戸初期に台頭した風俗画は、
 狩野派の筆法を基盤として土佐その他の画派
 が融合して一種の画風を作り出したもので、
 現今ではこの風俗画・美人画を江戸初期肉筆
 浮世絵と呼んでいます。これは上方（江戸時
 代の畿内・京阪地方の称）に起こって寛文の
 頃には殊に人心に投じて盛んに描かれました。

これが刺激となりこれにならって大津でも
 仏画の外に風俗画・美人画を描くようになった
 のです。大きさは半紙縦2枚継に定まってい
 たらしく、描方は仏画の場合と同様合羽刷
 を用い、泥絵の具を使い落款もしませんでし

大津浮世絵 ▶ 野郎（兵庫・某氏蔵）



▶ 文読む女（関川氏蔵）



たので、世間からは一般絵画より一段低い絵
 として扱われた様です。この時期に描かれた
 もので、今に残っているものに役者絵や「文
 読む女の図」等があります。ところで井原西
 鶴（元禄期を代表する浮世草子作者）もこれ
 等の絵を「浮世絵」と呼んでいます。全く
 肉筆浮世絵に近いのです。だからこれは、む
 しろ「大津浮世絵」と呼んだ方が適切な呼び
 方だと思えます。

しかし仏画のところでも述べた様に元禄時
 代を迎えて庶民が裕福になり、高価な一般絵
 画が買えるようになったために、大津で売る
 ような安い絵は買う人が減っていったのです。
 そこで大津の絵師達は一般の画家があまり手
 掛けない図柄の絵——風刺画を描いたのです。
 この風刺画とは鬼の念仏・鬼の行水・瓢箪鯨
 ・提灯釣鐘・鬼の三味線等の各図で、これ等
 が描かれることにより、いよいよ「大津絵」
 と名付け得る独特の画風が生まれ、しかもこ
 の時期に最も優れた作品が出現しました。こ
 れが案外旅人に受けたいいのですが、絵と
 しての価値評価から来たものではなく、興味
 本位であったのだらうと思えます。ただし
 風俗画を全く描かなくなったのではなく、藤

娘図や槍持奴図等はかなり人気があり後々まで描き継がれましたし、時局物としては、浪花五人男図が描かれました。今これらを見ますと比較的ていねいに描かれています。このような筆つきの絵が正徳の頃まで描かれたのですが、これを研究家は「初期大津絵」といっています。

中期の前期大津絵

元禄時代以降庶民が豊かになったと同時に物価高を招来しました。幕府は奢侈をいじめ質実な生活を奨めたのですが、大津絵などは物質的な実用品とか生活必需品と言ったものではないので、値上がりすれば最初に買い控えの対象になるものの一つですから、値上げすればいよいよ売れなくなる恐れがあります。それで原価を安く仕上げねばならぬところから所謂殴り描きとなり、無作為であり熟練からくる速描きをするようになりました。それがまた筆勢を呼び、描線は太くなりましたが健康感を表わすものとなりました。一見して初期のものより画格は落ちましたが、なかにはこれこそ大津絵になりきったものとして高く評価する人もあります。図柄は「雷太鼓」や「長頭翁梯子剃り」等の滑稽戯画や、

牛若・弁慶・為朝・頼光等歴史上で庶民に親しまれている人物を採りあげました。これはある程度の売れ行きを示したようです。しかし画の品位が落ちたため一般絵画として取り扱われず、だんだん土産絵として、また、甚だしきは玩具絵として扱われるようになりました。（註、大津絵の始祖が吃又平という画工であるという説が起ったのは宝永の頃からであり、また大津絵の別名を浮世絵・追分絵・大谷絵・山科絵などと呼ばれました。）

中期の後期大津絵

一方では価格を更に落とさねばならなくなり、大きさを半紙一枚版にしてしまいました。ちょうどその頃京都では「心学」が盛んになっていた時でした。心学というのは石田梅巖の創始したもので、孔孟の教えを無学な庶民にもわかり易く伝えようとしたものでしたが、たまたま大津絵の図柄を挿絵として、それに道徳的な和歌を添えた心学の本などが出版されました。大津絵師の方でも一枚版のものには、描いた絵の余白に心学の本に書かれたものと同じ道徳的な和歌を書いて売ったのです。例えば「鬼の行水」図には次の歌が書かれています。

初期大津絵

▶鬼の行水（小林氏蔵）



▶藤娘（日本民芸館蔵）



中期大津絵

▶鬼の行水（木村氏蔵）



▶長頭翁梯子剃（富田氏蔵）





中期の後期大津絵



天神(近江郷芸美術館蔵)
鬼の行水(滋賀・某氏蔵)

上皮を 洗ひみがきて 心をば
 洗わぬ人の 姿とやせん
 また、「天神図」には道真作と伝える和歌
 心だに まことの道に かなひなば
 祈らずとても 神や守らん
 を書き添えています。これは心学からきた和歌
 ではありませんが、道徳的な和歌であるところから天神図に添えたのでしょう。こうして大津絵に添えられた和歌(道歌)は、現在知られているもので120首以上にのぼります。これらを買って帰って子弟への土産とし、かねて家庭教育に役立てようとした。こういう状態は享和の頃までつづき、売れゆきも安定していたようです。ここで大津絵の画題がどの位あったかをいって置きたいと思います。仏画をあわせ早くから描かれ後々まで描かれたもの、まもなく描かれなくなったもの、途中から現われ後まで描かれたもの、短期間で消えたもの、文献に載っただけのものも合わせると110種以上を数えます。

末期の大津絵

文化・文政以降は大津絵も末期にはいりました。それは欧米の文物が流入して来て、こ

れまで持ちつづけてきた日本の文化は軽んぜられることになり、大津絵などはことに打撃がひどく、顧みられなくなりました。ついに販売を縮小せざるを得なくなって画題も10種に限られるようになり、1題ごとに護符であることにすることなどで、やっと命脈を保つ有様となりました。絵師達も各個に別れて方策をたて、大きさを更に縮小して全部を木版にする者や、画家気取りとなり全部肉筆で描き署名をする者も出ました。これは自然に伝統を破ることになり厳密な意味での大津絵から遠ざかる結果となりました。さらに明治になって交通機関が発達して旅人が通らなくなり、大津絵は顧客を失ったのです。このようにして大谷で大津絵を描いていた絵師利田泉隣が明治38年に75才で亡くなり、大津追分・大谷においての大津絵は、その歴史を閉じたのであります。(大津絵は巾広く、例えば絵画・演劇・文学・音曲等社会に影響を与えたのですが、それ等のことは、この項の本旨ではありませんので、次の機会にゆずりたいと思います。)

(片桐修三氏提供)